

■土木工学の使命

戦前に東京帝国大学教授として多くの優れた技術者を育てた廣井勇は、貴い日々の生を省みて神に感謝する心の余裕を生み出せないのであれば、土木工学になんの価値があるのか、という意味のことを言った。廣井先生の言は、いま強く筆者の胸にせまる。

われわれの日々の生すなわち日常は、おおむねたいくつで面倒で、日頃はそのありがたさが意識されないし、その自明性が疑われることもない。しかし、昨年3月の津波と原発事故は、多くの市民の日常を瞬時に奪い去り、そして日常を取り戻すことがいかに困難かを、われわれに突きつけた。

筆者が会った被災者の一人で、妻、子供、孫など自分以外の家族全員を津波に奪われた方がいる。かつての日常は、もう二度と戻らない。そういう人が、いったいどれだけの数いることだろう。病院に通いながらろうじて日々を生き続けるその方の絶対的孤独を想像するにつけ、変哲なく日々過ぎていく日常が、じつはどれほど貴重、生きることの根っこになっているかを思う。同時に、それがいかに壊れやすいものであるか、も。

言葉にすれば平板だが、土木の使命とは、人間の日常を豊かにすることであると思う。人間が生きるということの根っこを癒し、たくましくすることであると思う。それが、いつの時代もゆるがぬ土木の基本使命ではないだろうか。

■復興について

しかし今の土木という技術は、この使命にたいしてかならずしも忠実に機能しない。専門分野は、日常を細かい要素に細分化して成り立っている。たとえば土木は道路、橋梁、河川、海岸、鉄道などに分割され、その下にいくつもの専門分野がツリー状にぶらさがる。専門家は、そのツリーの末端のおのおのを高度化、最適化する。それらを足し合わせれば、結果的に豊かな日常の基盤ができあがるだろう、というわけである。

この専門分化システムは、すでに確立している日常を大過なく維持するうえでは有効だろう。しかし、日常をまるごと再構築しなければならない今次の復興のような非常の状況では、ほとんど機能しない。たとえば防潮堤という細分化された一要素をとりだして、そのなかだけで津波防御の解を最適化しようとするれば、高く頑丈にする以外の選択肢はない。それが日常の価値と激しく対立しようとも。

防潮堤に、話がかぎらない。これは、いまの専門技術のありかたがもたらす必然的な帰結である。ツリーが崩壊してしまえば、末端でそれぞれいくらががんばっても全

体の再構築にはつながらない。全体をつくりなおすのは、端末とは別の意志なのである。

筆者が復興に関わっている岩手県大槌町で、昨年8月に当選した現碓川豊町長の公約のひとつが「海が見える、つい散歩したくなるこだわりのある美しいまち」であった。あの状況下、豊かな日常の復権を復興の目標に据えた、珍しい首長である。しかしいざそれを実現しようとする、とたんにおおきな困難に直面する。計画や事業の対象がなんであれ、現行の枠組みは、ことごとくと言ってよいほど、対象を個別要素すなわち端末に還元してそれぞれ高度化・最適化する手続きを強いるからである。当然、海は見えなくなる。日常が消滅した非常時に、日常を維持するための方法論に頼らざるをえないという矛盾。復興の現場は、この矛盾と闘い続けている。

■専門家として銘記すべきこと

漱石の『三四郎』の冒頭に印象的な場面がある。上京の車中、広田先生が三四郎に向かって、日本は滅びるね、と言ったあと、熊本より東京は広い、東京より日本は広い、日本より頭のなかのほうが広い、と続けるくだりである。漱石は広田先生の口を通して、より広い世界にたいする想像力を養おうとしない当時の日本人への危惧を語ったのだと、筆者は解釈する。そして、その危惧はたがうことなく、日本は国際的孤立、軍国主義、敗戦、占領という滅びへの道をたどっていく。

広田先生の言は、いまの専門技術のありかたへの警鐘としても読める。自分のいる場所よりも広い世界への想像力の回路を、つねに開いているか。知らず知らずのうちに、土木のなかに閉じて孤立した論理、個別要素のなかで自己完結した端末世界の窓から、ものごとを見、語ってはいないか。

もとより、土木という専門分野などちっぽけなものでしかない。世界は広い。そして人間の想像力こそ、専門の枠はもちろん、異なる論理や価値観、立場、あるいは人種・国境・時代などをも軽々と飛び越え、また日常と非常時を自在に行き来できる道具である。

専門分化の欠点を補い、個別技術を豊かな日常へと総合するために、広い世界への想像力をこそ、養いたい。